

第193回 上級 商業簿記

問題1は、割賦販売に関する出題でした。近年取り上げられることがなかったためか、できはあまりよくありませんでした。白紙で捨て問とした答案も見られました。計算がわからなくても、勘定科目を類推するなど、少しでも部分点をとろうとする粘り強さが必要です。

問題2は、資産除去債務に関する出題でした。できている答案とそうでない答案が二極化していました。桁数が多く面食らったかもしれませんが、落ち着いて計算することが必要です。採点をしていて、とても気に入ったことが2点あります。まず1点目は、取引のまとまり(仕訳の貸借のつながり)を無視して、貸借ばらばらに仕訳の要素を羅列している答案が散見されたことです。すなわち、

A ×× / B ××

C ×× / D ××

という仕訳があったとします(ただしA~Dは勘定科目、××は金額)。これは、「AとB」、「CとD」という要素のつながりに取引としての意味があります。これを、

A ×× / D ××

C ×× / B ××

としてしまっただけでは、要素は出そろっているかもしれませんが、そのつながり(取引としての意味)を無視しています。したがって、解答欄の行ごとにひとまとまりの取引が入るという前提で解答する必要があります。2点目はケアレスミスが多い点です。たとえば、資産除^去債務を資産除^却債務としたり、桁数を間違っていたり(0の数が違っていたり)、ほとんど正解の数値が書かれているのに一か所だけ数字が違っており電卓の数字を見間違っただけと思われるものがあったり、解答する年が違っていたり(2年目を解答していたり)といった具合です。おそらく落ち着いて解答すれば正解したと思われるので、このような間違いは残念です。

問題3は、閉鎖残高勘定の作成に関する出題でした。できている答案とそうでない答案が、比較的二極化していました。基礎的な論点を多くしたつもりでしたが、収益・費用の見越し・繰延べといった基礎中の基礎の論点ができていない答案が多かったのは意外でした。また、未収収益と未収入金とを混同している答案が散見されました。勘定科目を覚えるときは、紛らわしい勘定科目との違いに留意しながら覚えることが重要です。

第193回 上級 会計学

問題1は、従来どおりの論点を従来どおり出題しましたので、これまでと同じように、出来不出来のはっきりとした採点結果でした。ただ、解答のいくつかについて、残念に思われるものがありましたので、2つ指摘しておきます。1つ目は、できるかできないかを問うているわけではない問題文に関して、誤っている理由として、「○○○は・・・できる。」と解答している例が見られました。たとえば、3. では「相殺せずに表示する」が誤りであることは理解していながら、「同一納税主体の繰延税金資産と繰延税金負債は相殺できる。」という解答がありました。しかし、これは、「同一納税主体の繰延税金資産と繰延税金負債は相殺しなくてもよいが、相殺してもよい。」という意味になり、前半部分(下線部)が誤りですので、正当にはなりません。2つ目は、誤りを的確に指摘しているにもかかわらず、さらに記述し、しかも、その記述が誤っている例が見られました。いわば、余計なことを記述しているわけですが、残念ながら、これは減点されますし、誤った記述の内容次第では全く得点できない場合がありますので注意してください。

問題2も従来通りの問題で、穴埋めとともに、特定の論点に関して記述してもらう形式でしたが、誤答については、誤字によるものが目立ちました。自己株式の「消却」であって、「償却」や「消去」ではありません。また、「繰越利益剰余金」であって、「繰延利益剰余金」ではありません。正確に記述されていれば正答となっていたわけですから、大変残念に思います。

問題3は、連結会計に関して、特定の計算や取扱いの理由が理解できているかどうかを確認する問題です。問1については、①企業集団内部の連結会社間の取引と②連結企業集団と連結企業集団外部との取引のそれぞれが連結会計において有している意味を、連結財務諸表における数値に含めるべきかどうかという観点から考えてください。問2については、X社株式の処分後もX社が子会社であれば、当該処分は非支配株主という広い意味の株主との直接的取引であるから資本取引に該当するということが的確に説明される必要があります。

第193回 上級 工業簿記

問題1は、部門別計算を含む個別原価計算の問題でした。具体的に、問1から問4は補助部門費の配賦にかかわる問題、問5と問6は原価差異の把握に関する問題、問7は仕掛品勘定の記入に関する問題でした。全般的に、受験生の学習の進捗度がいくつかの層に分かれているように感じました。

問1から問4は、部門別計算の基礎的な事項である、直接配賦法と階梯式配賦法についての問題であり、かなり平易なものでした。しかし、正答できなかった受験生が多くいました。とりわけ、基本的な問1を正答できていない答案も見られました。こうした受験生については、工業簿記の基本事項を学習していなかったと考えられますので、テキストの例題を練習し理解した上で、受験に臨むようにして下さい。

問5と問6は、予定配賦率算定後の補助部門費勘定の記入にかかわる問題であり、正答できた受験生は、予想よりも多く見られました。しかし、問6の「特徴」と「前提」の論述については、残念ながら多くの受験生が的確に記述できていませんでした。例えば、論点のずれた内容を記述している、説明が不足している、そもそも「特徴」と「前提」について説明していないなどです。論述問題は、単に記述すれば良いというものではなく、問われている内容を的確に記述することを問うものです。そのため、今後は、計算手順や記述の解答例を単純に記憶するだけでなく、問題で問われている内容を他者が理解できるように記述することを心がけて下さい。

問7は、部門別計算を前提とした仕掛品勘定の記入問題であり、多くの受験生にとって難しかったようです。しかし、仕掛品勘定は基礎事項であり、かつ、勘定記入そのものは工業簿記にとって重要ですので、過去の問題などを繰り返すことで応用力を身につけるようにして下さい。

問題2は、非累加法による工程別総合原価計算の問題でした。問1と問2は、ともに基本的な内容（計算問題と空欄記入）でしたが、正答できた受験生が予想よりも多くいませんでした。これは、特定の事項に的を絞って学習した受験生が多かったことを反映していると考えられます。そのため、特定の事項にのみ集中するのではなく、幅広く学習し受験することをお勧めします。

最後に、今回の採点においても、数字や文字が雑に書かれている答案が多く見られました。例えば、解読困難な数字（0と6や、1と7と9など）、極端に小さい数字や文字、極端に薄い数字や文字などです。これらは、工業簿記の学習以前に、日常の学習プロセスで改善が可能です。数字や文字を正確に分かりやすく書くことは、受験生として当然注意すべきなので、今後気を付けるようにして下さい。

第193回 上級 原価計算

今回は問題1で直接原価計算を、問題2で設備投資の経済性計算を出題しました。

問題1は直接原価計算の基本的な問題です。問2、問3では小数点以下の数字の処理の指示がありますが、これを守っていない解答がありました。問4に計算過程を示すこと、と指示を出しましたが、過程を示していない解答も少なからずありました。また、問5では、「安全余裕率に関わらせて具体的に」述べなさい、と指示しているにもかかわらず、具体的に安全余裕率が何%になったのか（あるいは何%変化したのか）といったことに言及していない解答や、まったく安全余裕率に触れずに解答しているものが多数見受けられました。問題の指示を守っていない解答には点数が付きません。問題の指示をよく読んでそれに沿って解答していただきたいと思います。

問題2は設備投資の経済性計算の問題でした。問1の年々のキャッシュフローを問う問題では、多くの人が最終年度のキャッシュフローを間違えていました。最終年度は、通常のキャッシュフローに加え、運転資本の解除、設備の売却額、除却費用、除却損の税金節約額（タックスシールド）を考慮に入れなければなりません。また、円単位で解答すべきであるのに千円単位で解答している答案も少なからずありました。当然、不正解です。千円以下(000)をバーで省略している解答もありましたが、これも不正解です。問5では「相互排他的投資案を選択する場合の」という条件を付けて2つの方法の優劣を問うているのに、それぞれの方法の内在的な欠点（つまり相互排他的な投資案の意思決定の状況ではなくても指摘される欠点）だけを書いている答案が多数ありました。問題が問うている条件下ではどう優劣が付けられるのか、ということに言及しないといけません。

全体の採点を通して、問題文の読み込みが足りないと感じました。解答に際しての条件や指示をよく読まずに解答している答案が多数見られました。試験にあたっては、まずは問題文をよく読んで出題者の意図するところ、そして解答上の指示をしっかりと読んで欲しいものです。

また、毎回指摘しているのですが、文字・数字が読み取りにくい答案がかなりあります。小さい字、薄い字、判別に困る数字等です。また、用語や論述の解答での誤字脱字も目立ちました。簿記は人が見る記録です。人に見せる、ということを意識して解答しましょう。